



令和3年7月9日発行

さんあい広報タスク

児童養護施設さんあい

一時保護所オリーブ

ファミリーホーム三愛菫の里

自立援助ホーム三愛子ひつじ寮



『鬼滅の刃』の禰豆子（ねずこ）に想う

施設長 高瀬 一使徒



昨年から続くコロナ禍の影響で社会全体が低迷しています。そんな中で昨年より特に子どもたちに感動と勇気を与えた映画が『鬼滅の刃』です。さんあいの子どもの熱狂ぶりもすごく、段ボールを切って主人公の刀を作り『鬼滅の刃』ごっこをして遊ぶ姿がありました。子どもたちに登場人物や

ストーリーのことで話しかけられることも多く、これは園長としても一度見ておいた方がいいと思い、秋ぐちに近くのシネマコンプレックスに行きました。確かに子どもたちばかりではなく大人も感動する映画でした。ストーリーには、家族の愛、悪に立ち向かう勇気、友情、自己犠牲等の人間の普遍的なテーマが織り込まれています。しかしそのテーマ以上に強く私の印象に残ったのは、ヒロインの「ねずこ」の姿です。ねずこは、鬼に襲われ家族を失います。自身も瀕死の傷を負いますが傷口に鬼の血が入ってしまい鬼として生まれ変わり生き延びることができました。人間が鬼になると理性を失い、生きるために人を喰おうとします。しかし「ねずこ」の中には人間の理性が生きていて、鬼から人間を守ろうとします。主人公である兄の炭治郎は、「ねずこ」を連れて鬼殺隊に入りストーリーは展開してゆきます。さて、私が何故「ねずこ」に興味をそそられたかと言うと、その姿がさんあいの子どものたと重って見えたからです。さんあいの子どもたちも、その本質は神様に創られた価値ある素晴らしい存在です。しかし反応性愛着障害や不適切な養育による影響で、「ねずこ」のように自分ではコントロールできない重荷（鬼の側面）を負っています。

さんあいの施設全体の今年度の目標は、昨年同様、「あいさつをする」と「暴言・暴力はしない」です。子どもたちの中には、感情のコントロールが難しい子、言葉で自分の気持ちを表現できない子がいます。そして些細なことから職員や他児への暴言・暴力として発展してゆくことがあります。しかしどんなことがあろうとも、子どもの本質は価値ある素晴らしい存在であることを忘れてはいけません。子どもたちに宿ってしまった鬼の側面を子どもたち自身がコントロールできるように支援するのが施設の役割です。それは簡単ではありません、知識や技術は言うまでもなく、信じて待つことができる強い忍耐力が必要となります。

5月31日、6月14日に開催された理事会と評議会により、令和2年度の活動報告及び収支決算は承認されました。昨年度は書面による理事会、評議会でしたが、今回は新理事・新評議員の選任もありましたので対面で開催いたしました。昨年度の法人全体の歩みを俯瞰的に見ますとコロナに翻弄された年でした。しかし、その中でも子どもたちと職員が大きな病気や事故から守られ財政的にも黒字で終えられたことは、神様からの恵と受け止めています。今年度もさんあい祭りを開催できず、日頃ご支援くださる皆様に直接感謝を述べる事が出来ないのが残念ですが、来年こそはと希望をもって歩みたいとも思います。

～女の子ブロック～

ねむのき、いちょう、ポプラの3部屋で構成される女の子ブロックは、幼児3名、小学生6名、中学生4名、高校生5名の計18名の児童と、新任職員2名が加わった10名の職員でスタートしました。年度途中で2歳児童が里親委託となり、新しく年中児童を迎えました。年度末に高3児童と中1児童が退所。高3児童は保育士を目指して短期大学に進学し、施設から離れ一人暮らしをスタートしました。中1児童は新しい場所でのほんの少しの不安と大きな期待を抱きながら、笑顔で家に帰りました。

上から下まで甘えん坊が揃った【ねむのき】さんは、職員を取り合う幼児さん、宿題に苦戦して泣き出す小学生、夜遅くまで職員と語っても語り足りない高校生で構成されました。特別外出はサマーランドへ行きました。

「我が道を行く」子どもたちが、皆で力を合わせて何か1つでも形にできないか、と職員が最後のイベントとして考えたのは、皆で気持ちを1つにしないとできない「ドミノ倒し」。皆の気持ちが1つになった瞬間は感動ものでした。



小学生以上の高齢児が揃った【いちょう】さん。しっかり者の高校生は職員を助けてくれる頼もしい存在。小中学生は音楽番組を観て歌ったり踊ったり、喧嘩もありましたが毎日楽しく過ごしました。特別外出では、茨城県のおさかなセンターで自分好みの丼を作り、大洗水族館でイルカショーを楽しみ、笑顔いっぱいの外出となりました。受験生と呼ばれる大事な時期の児童も2名いましたが、無事に自分の希望した学校に合格することができました。

「自分の言葉に責任を持つ」と令和2年度の目標に決めた【ポプラ】さん。中高生がBTSにはまった事で、お部屋がBTS一色になった時期もありました。特別外出では東武動物公園へ。帰りには大好きなお寿司も食べて大満足の外出となりました。また、毎月1日を「ふわふわ言葉の日」として、お部屋全体でふわふわ言葉を使うようにと子どもたちに繰り返し話をしてきました。その結果、生活の中で「ありがとう」の言葉が増えました。



令和2年度は新型コロナの影響で休校が続く中、身体的・精神的に苦しい時期もありましたが、職員1人ひとりの体調管理のおかげで、皆健康で1年を終える事ができました。年々子どもの課題も変化し、専門職としてのスキルアップを求められる事が増えてきたと感じます。来年度も「子どもと一緒に成長していく」という謙虚な姿勢を忘れず、1つのチームとして悩みや痛み、そして喜びを共有しながら、子どもたちにより良い支援ができるよう頑張っていきたいと思います。

女の子ブロック主任・河村

～男の子ブロック～

新型コロナウイルスが蔓延する中、令和2年3月に緊急事態宣言が発令。始まった臨時休校は新年度も続き、長い春休みからのスタートとなりました。今年度の男の子ブロックは、新入所児童4名、新入職員3名を迎えました。3部屋全てのリーダーも新しくなり、本来ならば年度当初に行う職員へのOJTは、いつ終わるかわからない休校措置のためにできず。外出もままならずストレスを抱えた子どもたちが常にいる状態に対応する中で、気がつけば職員が続々と休職に陥る事態となりました。



そのような中、4月には昨年度から里親委託に向けて交流を開始していた年少男児が、正式に里親委託になるという良いニュースも舞い込んできました。また、年少男児が里親委託となり、男の子としての空きが1名出たことで、7月には新たに年中男児を迎え、体制を整えての再スタートとなりました。

新型コロナウイルスへの社会の対応が一進一退な中、多くの児童が楽しみにしている夏休みの特別部屋外出も実施が危ぶまれました。最終的に宿泊はせず、日帰りとし規模を縮小することで実施できたことは感謝でした。年度末には、小学校1年生から入所していた小4男児と中3男児の家庭引き取りが決定し、3月に皆で送り出すことができたことも嬉しい出来事でした。

改めて1年間を振り返ってみると、常に忙しく、とにかく慌ただしい年でした。来年度は落ち着いた環境でスタートを切り、より良い養育ができるよう心から願っています。また、マスクの着用や消毒の必要な生活が引き続き続きますが、新型コロナウイルスが少しでも早く収束し、例年通りの活動が再び行えるようになることを心から願っております。

男の子ブロック主任・加藤

～一時保護所・オリーブ～

令和2年度は1年を通して、21名の一時保護児童を受け入れました。退所後の行き先は約7割が家庭復帰、約3割が施設措置や他の保護所等と、子ども達の安心と安全が守られる場所へと見送ることができました。最短2日、最長336日の保護期間中は、一日の流れに沿って学習に遊び、掃除も分担し、気持ち良く安心して安全に暮らせるよう努めました。

新型コロナウイルスの影響で外出が難しい時期もありましたが、週末は図書館やレンタルビデオ店に行ったり、夏は川遊びをしたりと近隣で行けるところを探して楽しみました。また、今年度の大きな出来事として開所後初めて、一時保護中の受験がありました。児童も職員も手探り状態でしたが、学習ボランティアの先生等にご協力をいただき受験勉強に取り組み、職員も模擬面接のために協力をするなど、多くの方々の協力を得た結果、無事に合格することができました。



住み慣れた場所から離れての生活は、子ども達にとっては心と体に大きなダメージを与え、不安を強いるものです。少しでも安心して過ごせるよう、子ども一人一人との丁寧な関わりを心がけながら、一時保護後の方向性を決めるアセスメント力を高めていきたいと思います。

一時保護施設リーダー・柳井

昨年に続き今年もコロナ禍で、外部からお客様を園にお招きする行事は基本的に実施を見合わせています。ただ、このまま地域の方々と大切なつながりが薄れていってしまうことがあってはならないということで、「我ら、さんあい応援団」と題していつもさんあいを応援して下さる方々のご紹介をこの誌面で行っていくことにしました。第1回にご登場いただくのは松島さんと小室さん。さんあいの目と鼻の先にお住いの“ご近所”さんです。

松島 健一さん・カズエさんご夫妻

「このあたりは昔は原野だった。戦後、その土地を国が耕作のために分けることになった。母親の実家が岡部で、その話を聞いた父親が申し込んで、家族でここに移り住んだんだ。」「たくさんの大木が生えていて、今みたいに重機もなかったから、その根っこをみんな手作業で掘り起こして畑にしていた。」「移り住んだ家は、屋根はトタン板一枚。穴だらけで夜はそこから星が見えるし、雨が降れば雨漏りでたいへんだった」

・・・と語る松島健一さん。地元で中学校を卒業した後、一度は東京に勤めに出たそうですが、その後、また戻ってきてお父様が耕した土地を継がれたとのこと。



松島さん達が作ったお神輿の奉納。神主の後ろにいるのが高瀬美彦初代理事長。緑の法被を着てサングラスをかけているのが若き日の松島さん

2008年にさんあいが現在の櫛挽に移転してきてからは、さんあいの子どもたちも櫛挽の同じ地域のメンバーとして面倒を見て下さるようになりました。器用な松島さんは、子どもたちが喜ぶようにと子ども神輿を作ってくださったこともあります。

そしていつも季節になると、ご夫妻が収穫したトウモロコシやブロッコリーといった旬の新鮮な野菜を子ども達のために届けてくださいます。

これからもお元気でさんあいと地域の子どもたちのことをよろしくお願いいたします。



いつもトラックいっぱいのトウモロコシを子どもたちに届けて下さる松島さん

「この地域は、もともと人が住んでいなかったところに開拓で人が移り住んだ。だから、子どもたちが喜ぶ祭りもなかった。そこで若い衆で集まって祭りを始めた。神輿だって手作りさ。」と言って当時の写真を見せて下さる松島さん。よく見ると法人の初代理事長・高瀬美彦先生が写っています。当時、さんあいは隣町の本郷にありましたが、櫛挽に家のあった美彦先生とは、その頃からお付き合いがあったそうです。



松島さんご夫妻

小室朔彦さん・清美さんご夫妻

子どもの登下校時の安全確保は、どの地域でも課題です。櫛挽から小学校までの通学路で、いつもさんあいの子供たちに笑顔で声をかけ、危険がないか見回りをして下さっているのが小室清美さんです。二十歳で結婚してからずっとこの地に住み、地域の移り変わりを見てこられた方です。

さんあいの子供たちと直接とのかかわりが深くなったのは、お孫さんができてからとのこと。ちょうど、さんあいが櫛挽に移転してきた時期とも重なり、お孫さんたちが通う小中学校にさんあいの子供たちも通っていたことから、同じ地域の子供としてさんあいの子供たちのことも気にかけるようになったそうです。

「私が気にかけるというより、さんあいの子たちが孫のおばあちゃんとして私に声をかけてくれるからよ」と話される清美さん。今の小中学生から、高校生になった子どもの名前まで憶えてくださっています。師範の免許を持つ清美さんは、さんあいの子供たちに習字を教えて下さることもあります。

「1キロ以上ある通学路は平坦だけれど子どもの足には相当な距離だし、車はスピードを出して通り過ぎるので心配よね。」と語る清美さん。子供たちの安全を守るため、今日も通学路に立ってくださっています。また、通学途中でトイレに行きたくなくなってしまった小学生を見つけて、一緒に隣家に飛び込んでくださったこともあるとか。そんな清美さんですが、唯一、困ることは大の苦手のヘビが通学路にも時々現れること。そんな時は子供達と一緒に逃げるそうです。

現在のさんあいの建物は小室さん宅の目の前にありますが、移転してくる前、近所には桑畑が広がっていたそうです。小室朔彦さんも、ご両親がこの周辺の土地を国が分けるという話を聞き応募して入植。それ以来、この地に住んでおられます。「静かで子育てには良い場所だから、これからはずっとそうであって欲しいね」と話すご夫妻。これからもさんあいの子供達、地域の子供達を見守っててください。



通学路に立ち子供達に声をかける清美さん



さんあいが建つ前の様子。手前が小室さん宅。奥が現在のさんあいの場所。大雨が降るとよく冠水したそうです。



小室さんご夫妻

オリーブ

2021 年6月末、オリーブの在籍児童は6人。幼児から高校生までおり毎日元気に大きな声で遊んでいます。大きな子はよく小さい子の面倒をみてくれます。小さい子も大きい子に甘えるように遊んでもらっています。食事では、野菜が嫌いな子、食べたことがない子もいましたが少しずつ食べられるようになり、日々成長を感じています。(小暮)

茜の里

茜の里では昨年、大きな問題が発生しました。こんな時こそ、本来の目的は何か？課題を解決する良い方法はないか？納得して進めるために、子ども達との話し合いの場を大切にしました。こうすれば絶対上手くいくという方法はないかもしれませんが、しかし、子ども達の権利擁護と安心安全な居場所づくりを大切に、これからも生活を共にして、子ども達の成長を見守って行きたいと思っています。コロナ禍で迎えた令和3年度、子ども達の心身への影響が心配されますが、茜では各々の将来の夢、目標をもって活力ある日々の生活を送ることが出来ています。これからも皆様のご支援宜しくお願いします。

(野口)

ワクノビ・クラブ

今年度より、さんあいにアニマル・クラブの他にワクノビ・クラブができました。このクラブは、子どもたちにボランティア精神や広く様々な世界に興味を持ってもらおうという目的で始まりました。現在メンバーは7名程度ですが誰でも参加できます。第一回目の活動は6月19日に行われました。内容はこれからのクラブの活動についての話し合いをして、施設の近くを通る人向けにプランターにお花を植えました。小さなことからスタートですが、子どもたちがワクワクしてノビノビと活動でき、誰かの役にたつことを大切にしてくるクラブにしてゆきたいと思っています。

(ブログより)

小学校運動会

新型コロナウイルスの影響で昨年は開催できず、今年は2年ぶりの運動会となりました。1年生はもちろん、2年生も初めての運動会ということで開会式では緊張している様子も窺えました。短縮されたプログラムの中で子ども達は自分の力を最大限発揮していて、とても感動しました。マスクを着用して実施した運動会はこれから先も子ども達の思い出に強く残ると思います。(木之内)

赤城山自然体験

山田昇記念財団のご招待を受けて中高生5人で赤城山自然園での自然体験を楽しんできました。午前中は先生のご指導の下、園内を散策。実際に匂ってみたり、触ってみたりしながら樹木や草木の観察をしました。「自分も人生で初めて見た！」と先生が興奮して紹介をして下さったのが、光合成をしない植物、ギンリョウソウ。自然の不思議さをあらためて感じる体験でした。午後からは、これも専門のインストラクターの方たちの指導でツリークライミングをしました。ロープを使って10メートル以上はある木の間を上っていくのはちょっぴりスリリング。高いところはちょっと苦手な子も果敢に挑戦。2回目だからと素早く昇って何度も昇り降りする子もいました。楽しい機会をありがとうございました！

(ブログより)

いちょうの広場



いつもあたたかいご支援ありがとうございます。

ご寄付は同封の振込用紙、又は下記の口座をお願いします。＊お名前をお入れください＊

埼玉りそな銀行 岡部支店 0058888

編集後記

初夏になると、果物屋さんに出回るビワの実。古来より、ビワの木には様々な薬効があることで知られています。果実の薬効は糖分やビタミン・ミネラル類などの栄養成分だけでなく、皮膚や粘膜の健康維持を助ける栄養素であるビタミンAに変換されるβ-カロテンや抗酸化性の期待できるポリフェノール類が多く含まれているそうです。さんあいの庭には今年も沢山のビワの実がなり、子ども達も「美味しい～」と笑顔で頬張っていました。季節の恵に感謝し、旬の物をありがたく頂き夏の猛暑を乗り切ろうと思います。

(広報タスク同)